

『信じる？信じない？』(ヨハネの福音書 20 章 19-29 節) 2022.5.8.

<はじめに> 情報が満ちあふれている時代に私たちは生きています。見聞きするものの中から、何が信頼できるものなのかを識別する力が一層重要な時代です。イエスの復活という信じ難い出来事を経て、弟子たちの中でも受け留めが分かれています。

I 私たちは主を見た

① イエスが来て(19-23)

「その日」はイエスがよみがえられた当日です。弟子たちが戸に鍵をかけていたところに、イエスが現れます。「平安があなたがたにあるように」(シャローム)は挨拶の言葉です。手と脇腹を示されたのは、あの十字架にかけられたイエスであると分からせるためです。

② 決して信じません(24-25)

イエスが現れたとき、トマスは不在でした。イエスに会った他の弟子たちが「私たちは主を見た」と彼に伝えますが、彼は自分の目で見、自分の手で確かめない限り、決して信じない、と言い放ちます。むしろ安直に受け留めている者たちを責めるほどに厳密です。

③ 見なさい 入れなさい(26-29)

8 日前の状況が再現されたかのようなシーンです。今回はトマスも一緒にいたところにイエスが現れ、前段のトマスのことばに呼応した「…見なさい。…入れなさい」と促されます。トマスは「私の主、私の神よ」と答えます。彼はどうしてイエスだと認めたのでしょうか。

II 信じる(ない)理由

① 経験する

トマスが他の弟子たちの「主を見た」との報告を真に受けなかったのは、その場に居合わせなかったからです。体験したか否かは、私たちの理解と納得に大きな影響を与えます。しかし、私たちはすべてを自分で体験することはできません。

② 証言を聞く

私たちが信じていることの多くは、自分以外の人の経験・証言によるものです。大多数が同じことを言っているなら信じるでしょうか。トマスはどうでしたか。情報を届ける人が何者であり、どれくらいその人を信用できるかによって、受け留めが変わります。

③ 証拠で確かめる

「主を見た」と証言する弟子たちに、トマスは目撃情報以上の証拠を求めます。証拠は経験や証言を裏付け、保証しますが、それがなければ事実も消えるわけではありません。私たちはこれらを組み合わせ積み上げて、真実を受け留めようとしています。

III 信じる者になりなさい

① 父がわたしを遣わされた(19,21,26)

イエスは信じない弟子たちの許に現れ、ご自分を示されます。父なる神は、神を信じない世にご自身を示すために御子イエスを遣わされました。イエスの教えとみわざは、神から遣わされた者の証でした。その目的は、神からの平安をもたらすためです。

② 聞いておられる方(25,27)

トマスは 8 日前にイエスと会ってはいませんが、自分のことばを聞いておられた、と直感したでしょう。姿は見えなくても私の声を聞いておられ、それに答えてくださる方がいるでしょうか。そうであれば、その方は今も生きておられると証言するのは行き過ぎでしょうか。

③ 残さず赦す(23)

イエスはトマスを一人そのまま残されません。生きている者を死人扱いするのは、人格否定です。その罪をイエスは責めないで、むしろ彼のために再び現れ、彼を信じる者にしようと働き掛けられます。罪は神に赦される平安を伝えるために私たちも遣わされています。

<おわりに> 信じられるか否かを見極めるのが難しい局面ですが、信じることをあきらめてはなりません。主観的な経験や証言・証拠の奥にある、証人の人格、言葉と行いの真実さによって見分けることができるのではないのでしょうか。あなたにとってイエスは信頼できますか。(H.M.)